

支援を必要とする 子どもや家庭を めぐって

「家族の再統合と地域の支援」



東京有明医療大学
准教授 千葉 喜久也氏
(東北福祉大学 兼任講師)
一九七五年 秋田県庁採用 総務部(東京事務所) 福
社保健部(児童福祉課、中央児童相談
所、児童自立支援施設等)に勤務
二〇〇〇年四月 東北福祉大学専任教員
二〇〇七年四月 同大学准教授
二〇一〇年四月 東京有明医療大学准教授
新学科設置準備室長

親子が一緒に暮らすことだけが再統合ではない

現行の児童福祉法及び児童虐待防止法においては、親子分離をした後に、どのように家族(親子)の再生・再統合に向けて支援をしていくのかについての規定はほとんどないといっている。だが、子どもの救出・保護だけでは「子どもの最善の利益」が守られたことにはならない。関係機関による介入・保護は、同時に子どもを虐待のない安全な環境に戻す支援・作業の始まりでもある。

「家族(親子)の再統合」についての議論はまだ始まったばかりであり、児童虐待が日本より先に深刻化した欧米でさえまだ議論は熟していないが、親もしくは養育者から緊急避難的に分離した子どもの家庭復帰を意味するのではなく、様々な援助に

よって分離した子どもと親(養育者)との関係を再構築していく過程で、もつとも望ましく適していると考えられた親と子の形態のことである。

「再統合」という言葉から「親子が一つ屋根の下で暮らす状態」を連想しやすいが、最終目標として掲げるものは、必ずしも親子と一緒に暮らす状態だけではなく、離れて暮らしていても「親子が親子であり続けられる関係・形態の再構築」であり、親子が安全かつ安心できる状態で互いを受け入れられる状態になることである。

目指すべきは、お互いに独立した存在として、成熟した人間関係を築くことにある。そのために親子が同居するか、離れて暮らすか、子どもにとって最善の方法を選択できる養育環境を形成することである。その上で、子どもが親と離れていても、親

大きな意義がある。

③社会のため

欧米由来の新しい子育て観は「子育ては、親と社会が協力し合うものだ」という考え方である。根底には「子どもは社会の財産である」という一貫した思想がある。子どもは親の宝だけではなく、社会の宝でもあるという発想により、子どもが生まれたときから社会も子育てに関わっていく。たとえ子育てに慣れた親であろうとも、社会が親任せにすることはせず、共同作業として協力し合うというスタンスである。

この考え方が日本に浸透していくと、子どもの産みやすい社会ということになる。「自分一人では子育ての力が足りなくても、社会が協力してくれるならば、自分もできるかもしれない」という親が増え、子どもを産むことをあきらめていた親、ためらっている親にとっては「産む」とへの決心が助長されることにもなる。また現在、子どもを養育している親にとっても、子どもとの関係が悪くなり施設に預けるしか選択肢のなかった親でも、家庭で養育が可能になると考えられる。そしてまた、仮に施設に預けた場合でも、子ども

(養育者)が進学や就職などを精神的・経済的に支えるような形態での再統合も考えられる。

家族の再統合が重要視されるようになった背景には、①子どものため②親のため③社会のため、といった理由がある。

①子どものため

家族(親子)の再統合が促される背景として、幼いころに施設に預けられた子どもの心理が挙げられる。大人の目線からは「親子が一緒に暮らすことが望ましい」という客観的な分析となる。しかし、子ども本人の考えは違う。「自分が悪い子だから、お父さんやお母さんは自分を叩いたのだ。それでも自分が良い子にならなかったから、施設に入れられたのだ」と、子ども自身は思っている。子どもが生まれて始めて触れる存在が親であ

る。その親を信じるのが、自分の身を守る唯一の手段なのである。

そのため、子どもは親に虐待されても捨てられても、それは自分のせいだと思ひ込み、親をかばい擁護する。「親は子どもを捨てられるが、子どもは親を捨てられない」という言葉もあるほど、子どもは親を信頼しているのである。

このような子どもが施設に入って家庭に戻ることなく成長した場合、どのような心を抱いて生きていくことになるのか。施設に入ること、「自分が悪い子だったから」と思ひ込んでいる子どもは、成長しても自分自身に自信をもてない。自分が求め続けている親に拒否されているという心理的ストレスは大きい。また、身近で親の姿を見慣れていないため、「自分も親のように」とか、「こんな時親は」のように、

を家庭に引き取りやすくなり、家族(親子)の再統合も進むものと思われる。

求められる親へのケア

児童虐待は家族関係・親族関係・地域住民との人間関係の希薄な家庭で起きることが多い傾向がある。また、虐待者に20代の母親が多いことから、育児経験の乏しさや、地域からの孤立、仕事と育児のストレスや不安が、母親を子どもへの虐待に向かわせていると考えられる。子どもへのケアは当然だが、虐待再発の根本的解決のためには、親(養育者)への専門的なケアや支援が必要不可欠である。親(養育者)への精神的なサポートやセラピー、育児スキルのアップ、普段子どもと接する機会の少ない父親の育児への参加など、早急に対応が求められる。

子育てを通じて結ばれる地域の絆

ではその対応として、地域では、今何が出来るのか?出来ること、やれることはたくさんある。「子育ては社会みんなで」の理念のもと、地域のそれぞれの場や機関で積極的な取り組みが期

待できる。地域にいる一人ひとりが役割を分担して、家族を支援するシステムとネットワークを構築することが大切だ。

手始めとして、まずは子育てをしている人を見かけたらあいさつや声をかけをしてみることだ。例えば、「こんにちは」「お疲れさまです」「子育ては大変でしょう」「何かあったらいつでもお声をかけてください」と。こうした言葉が、地域での子育ての孤立を防ぎ、子育て中の親と地域住民がつながるきっかけになる。

今日の児童虐待は、特別な親が起すものではなく、子育て中の親であれば誰が起こしても不思議ではない社会である。そこで、虐待を「子育て支援が必要な親のSOS」と捉え支援することが必要である。地域での子育て支援は、希薄になった人と人との関係を深め、地域で共に支えあう仕組みづくりのきっかけにもなる取り組みでもある。そして、子育てを通じて地域の絆が創造されることにもなる。皆様のご奮闘を期待しています。(寄稿)

